

春に花咲けば蝶が飛来し、自然の生業の中に生命の息吹が感じられます。ある檀家様宅の額には花開きて蝶来たり、蝶来たりて花開く」とあり、良寛は花無心にして蝶を招き、蝶無心にして花を尋ね」と詠んでいます。春の月を詠んだ詩に張若虚の春江の潮水海に連なって平らかなり海上の名月潮と共に生ず灘灘として波に随うこと千万里何処の春江か月明無からんと、海から月が上がり、水面が月の光を受けてキラキラと輝きどこまでも見通せる光景を詠っています。これも自然がもたらす抒情でしょう。しかしながら、最近ではシカやサルやイノシシ等の動物がエサを求めて里を荒らす様になりました。怖いのはクマに襲われ命を落とす人もできました。偏に我々人間が引き起こした結果でしょう。それは材木の需要があり、木を切り出せば植林し山を守ってきたときは森に動植物の生息の場があったのですが、材木の需要が他国の輸入に頼るようになると、木の伐採がなくなり、山は荒れ放題に下草も生えず暗い森となってしまったからです。山が荒れば当然水の問題が起きます。災害の多くは我々人間様が原因を作っているからではないかと考えさせられます。開発等責任の所在を求めるつもりは毛頭御座いません。全ては結果が証明します。太陽の光を陽とし、月の光を陰として、地球上の生態が動いていると私は思います。娑婆の生態は言葉で伝えようにも限界があります。又、文章にして残そうとしても限界があります。眼に映る姿をそのまま受け入れれば良いのでしょうか。美しいものは美しく、汚いものは汚いと。全てが美しい姿を保てるように心がければ良いのです。心の働きが美の存在を左右します。我が身の穢れを取り除いていくことにも成りましょう。短期の計画では無く、百年の計画を持って共生の実現を目指しましょう。自然の生業の中に人間も生息していることを忘れない様に。人生の成功はプラスとゼロとマイナスにあります。進むべき時に進め、止まるべき時には止まり。引くべき時には引く事が出来れば最良です。信心堅固にして神仏の御加護を頂き憂う事が無い様にしましょう。

仏教では「慈悲」を大切にします。伝教大師様は「悪い事は自ら受け、良いことは他人に与へ、自己を忘れ他人の利益になることをするのは慈悲の極みである」とおっしゃいました。かと言って、家庭を省みず、ムヤミに他の人の為動くのは家庭に不和を招くと思います。家庭に基盤があつてこそ「忘己利他」だと思えます。夫婦を中心として上下、それぞれ三十年として約百年の思いを馳せて計画を立て進むべきかと思えます。今さえ、自分さえ良ければと言う利他的行動、考えは捨てざるべきであろう。親に感謝を捧げる、次の代も親に感謝を捧げる、そしてその次の代も親に感謝を捧げます。逆に言えば自然に感謝される親に成らなければいけないのです。それが親としての努めでありましょう。親はオヤオヤ、子はジャリジャリ」ではどうにもいきません。親を満足させることができなくて、子供に適格なる意見をする事は出来ないと思っています。最澄は「隅を照らす、これすなわち国宝なり」と。今日の無事に感謝御礼申さずば、明日の無事を申せざるなり